E-2　文末の「ト思ウ」と英語の一人称・二人称代名詞の語用論的機能の同等性[1]

金沢じゅん（東京大学大学院博士課程）
jun-kanazawa347@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

要旨

本研究では、まず、新聞の投書と論説記事において、文末に現れ、意味的に余剰な「ト思ウ」には、書き手を顕示する *I think* の「ト思ウ」と、読み手の存在を強調する *I tell you* の「ト思ウ」の二種類があることを明らかにする。前者は、書き手である「私」の方にスポットライトを当て、読み手の存在を目立たないようにさせることで、意見を押し付ける圧力を弱める機能を持ち、後者は、反対に、読み手の方に焦点を当てることで、読み手を談話に巻き込む機能を担う。さらに、本研究では、この語用論的機能が、英語の一人称・二人称代名詞において、*I* が *you* の代わりに使われたり、*you* が *I* の代わりに使われたりする置換的使用にも見られることを示す。この対照研究を通じて、異なる言語の異なる言語形式に、書き手（話し手）を顕示したり、聞き手（読み手）の存在を強調するという共通の語用論的機能が現れていることを指摘したい。

1. はじめに

日本語では、一般的に、明確で直接的な表現よりも、曖昧で婉曲的な言い回しが好まれることが多い（中山 1985）。文末で用いられる日本語の「ト思ウ」[2]は、そのような非断定的な表現の一つとして研究が行われてきたが、「ト思ウ」には、削除することで文の意味が変化する場合と、しない場合がある（森山 1992）。例えば、「ト思ウ」がない(1a)は、文の意味が事実の報告であるのに対し、「ト思ウ」がある(1b)は、書き手の意見の表明となる。一方、(2)では、「ト思ウ」の有無に関わらず、文の意味は書き手の意見の表明のままである。本研究では、『読売新聞』の投書と論説記事[3]に現れる、削除しても文の意味を変化させない「ト思ウ」を分析対象とする。

(1) a. 早朝や夜間に使えるＡＥＤの数は限られている。
　　b. 早朝や夜間に使えるＡＥＤの数は限られていると思う。（2016 年 11 月 22 日、投書、「ＡＥＤ　いつでも使える所に」）

(2) a. 多くの人が知識を持ち、情報を的確に受け止める力を持つべきだ。
　　b. 多くの人が知識を持ち、情報を的確に受け止める力を持つべきだと思う。（2015 年 5 月 30 日、論説、「観測インフラの強化必要」）

書き手が主張を展開し、読み手を納得させることを目的とする新聞の投書や論説記事では、削除可能な「ト思ウ」を多用することは、「自信のなさ」や「曖昧さ」などの印象を与える恐れがあるため、一見、不適切であるように見える。それにも関わらず、「ト思ウ」が頻出するのである。書き手は、なぜ、意味的に余剰であり、また、一見その使用が逆効果にも見える「ト思ウ」を多用するのかということが、本研究の動機である。

本研究では、新聞の投書や論説記事における「ト思ウ」には、書き手と読み手の対峙的関係を喚起し、その中で、書き手を顕示したり、読み手の存在を意識させたりという、焦点（スポットライト）の移動を調整する語用論的機能があることを明らかにする。そして、それが、英語の一人称・二人称代名詞において、*I* が *you* の代わりに使われたり、*you* が *I* の代わりに用いられたりする置換的使用にも見られることを指摘したい。日本語の「ト思ウ」と英語の *I* と *you* の対照研究は、筆者の知る限り、本研究が初の試みとなる。この対照研究を通じて、言語の違いを超えて、書き手（話し手）には、自分自身を顕示したり、読み手（聞き手）の存在を強調したりという焦点の移動を調整したいという語用論的動機があることを指摘し、それが異なる言語の異なる文法形式にどう言語化されうるのかを示したい。

---

[1] 本研究は、カリフォルニア大学バークレー校の長谷川葉子教授から多くの有益なご助言をいただいた。また、研究の一部は、フルブライト奨学金（IIE Grant ID#: E0627024）の助成を受けた。この場をお借りして、御礼申し上げる。

[2] 本研究では、文末に現れる「と思う」を「ト思ウ」と表記する。

[3] 本研究で使用したコーパスは、2015 年 1 月 1 日から 2016 年 12 月 31 日までの『読売新聞』の論説記事「論点」と投書記事「気流」である。

2. 文末で用いられる「ト思ウ」の先行研究

文末で用いられ、削除可能な「ト思ウ」の先駆的な研究として、森山（1992）が挙げられる。森山は、文末の「ト思ウ」には、「不確実表示」と「主観明示」の二つの用法があると主張する。前者は、(1b)のように、引用節の内容が話し手の主観的な推測（不確実なこと）として捉えられていることを示すもので、後者は、(2b)のように、引用節が話者の個人的意見であると断ることで、主張を和らげる用法である。そして、前述の通り、後者の「ト思ウ」は削除可能である。

また、森山は、(3b)のように、「ト思ウ」の引用節に話し手の意思や希望などの心情を表す文がくる場合も「主観明示用法」であると主張する。パーティ等の公の場では、(3b)が適切であり、(3a)は不適切であるが、森山によれば、これは、公の場では、「ト思ウ」を用いて引用節が一個人の意見であることを断ることによって主張を控えめにするのが望ましいからであり、(3a)と(3b)では、このような文体的な違い以外に意味の差はないと主張する。

(3) a. ？乾杯したいです。
　　b. 乾杯したいと思います[4]。（森山 1992: 112）

森山の研究は、その後の多くの先行研究の礎となった点で重要であるが、これは、「ト思ウ」の機能を話し手の立場からのみ分析したものであると言える。

一方で、聞き手の立場から分析を行った研究もある。小野（2001）は、(4a)では、道順やバスの番号などの情報の提供が求められる一方で、(4b)では、話し手の進学先や専門性に関わる情報の提供が求められるため、「ト思ウ」は、聞き手のより深い知識に働きかけると指摘する。

(4) a. 筑波大学に行きたいんですが。
　　b. 筑波大学に行きたいと思うんですが。（小野 2001: 28）

しかし、聞き手の回答は、発話時の状況や文脈によって、どちらにもなりうるという問題点があることは否めないだろう。また、宮崎（2001）は、「ト思ウ」の文が、(5b)のように、独り言では使われないことから、「ト思ウ」は、聞き手に対する伝達が意図されている場合に用いられると指摘する。しかし、両者ともに話し手への伝達が意図されている(6a)と(6b)における「ト思ウ」の有無の違いについては、詳しく論じられていない。

(5) a. よし、この仕事は今日中に終わらせよう。
　　b. ？よし、この仕事は今日中に終わらせようと思う。（宮崎 2001: 118）
(6) a. 君の誕生日には何かプレゼントをあげよう。
　　b. 君の誕生日には何かプレゼントをあげようと思う。（宮崎 2001: 118）

小野や宮崎の指摘は、「ト思ウ」の機能を聞き手の視点から分析しようと試みている点で特筆に値する。しかし、先行研究では、意味的に余剰な文末の「ト思ウ」において、話し手と聞き手という存在が、どのような役割を担っているのかについて、その理論的メカニズムまでは明らかにされていない。

3. 分析対象

本研究では、文末に現れる「ト思ウ」を分析するため、名詞節などの従属節内に現れる場合（「運動しようと思うことは素晴らしい。」）や、「ト思ウ」に等位節が後続する場合（「批判も必要だと思うが、優しく見守りたい。」）など、文末に現れない「ト思ウ」は分析対象から外す。また、「私は」「私も」などの一人称単数主語が明示されている場合や、「思います」などの丁寧体の場合も分析対象としない[5]。

さらに、「ト思ウ」を、①意味的、②文体的、③統語的に削除できない場合も、分析対象から外す。①意味的に削除できない場合とは、(7)のように、書き手の過去の体験などの既得情報を表す文が「ト思ウ」の引用節となっている場合である。この場合、削除すると文の意味が話し手の意見の表明から事実の報

---

[4] 以下、例文における傍線と太字は筆者による。また、記号「？」は、統語的に成立はするが、発話される状況で不自然なものを示し、「＊」は統語的に非文法的なものを示す。

[5] 希望の「たい」などのイ形容詞には本来、丁寧形の形式が存在せず、「と思います」などの思考動詞がイ形容詞の丁寧体として使われることがあるため（Hasegawa 2014: 80）。

告へと変化するため、削除できない。

(7) 炎天下で４時間だったか並び、話題の月の石とアポロ宇宙船を見た。その日は駅の待合室に新聞紙を敷いて寝て、翌日はソ連館にダッシュしたが大変な行列で３時間以上並んだと思う。（2016 年 4 月 17 日、投書、「「月の石」炎天下４時間」）

また、②文体的に削除が不可能な場合とは、引用節が独り言である場合（(8)）や、引用節の文末が省略されている場合（(9)）など、「ト思ウ」を削除すると文体的な違和感が生じる場合である。

(8) 「話すのは技術、聞くのは人の器」という言葉もある。意見を受け止めてくれる人がいなければ意味がない。世界のたくさんの声に耳を傾け、自分の言葉を返せたらいいなあと思う。（2016 年 10 月 4 日、投書、「話し上手は聞き上手」）
(9) 自治体間の災害支援で無駄や偏りがないように国が調整することも必要だ。「恩返し」がもっとやりやすくなればと思う。（2016 年 5 月 14 日、論説、「自治体ノウハウ　恩返し」）

さらに、③「ト思ウ」の削除が統語的に不可能な場合とは、(10)のように、従属節や副詞節が「ト思ウ」にかかる場合である。

(10) 消したメモを見ると、年月が過ぎるのは早いものだと思う。（2016 年 1 月 11 日、投書、「メモの習慣　夫婦で思い新た」）

一方で、分析対象とする「ト思ウ」は、引用節に、(11)や(12)のように、書き手の判断や評価を表すモダリティや、(13)や(14)のように、書き手の希望や意志を表すモダリティ、また、(15)のように、「確信」の断定形がくる場合である。

(11) 崩れた信頼は、容易には戻らない。私の会長任期を超えて、尾を引くだろうと思う。（2016 年 2 月 19 日、論説、「組織体質　頂点から改革」）
(12) 地震も火山も多い日本に暮らす以上、専門家だけでなく多くの人が知識を持ち、情報を的確に受け止める力を持つべきだと思う。（2015 年 5 月 30 日、論説、「観測インフラの強化必要」）
(13) これからは少しずつ本を読んでいき、たくさんのことを学んでいきたいと思う。（2015 年 4 月 21 日、投書、「読み聞かせ楽しみ」）
(14) これからは素直に謝ったり、礼を言ったりして、妻と笑顔で暮らしていこうと思う。（2015 年 1 月 5 日、投書、「ありがとうを伝え　平穏な老後送ろう」）
(15) 交通機関が販売している PASMO（パスモ）や Suica（スイカ）のような IC カードを、飛行機内で買えるようにする検討も有意義だと思う。（2015 年 7 月 31 日、論説、「情報通信技術で「おもてなし」」）

4. 新聞の投書と論説記事に現れる余剰的「ト思ウ」の分析

4.1. 話し手を顕在化させる「ト思ウ」

文末に現れる「ト思ウ」には、その主語が必ず一人称単数でなければならないという制約がある。

(16) ｛私／＊私たち／＊あなた／＊彼／＊彼ら｝は、皆が思いやりを持つべきだと思う。

したがって、「ト思ウ」の主語は、明示されていない場合でも一人称単数であると理解されるため、否応なしに聞き手の意識に話し手（一人称）の存在を喚起させる。本研究では、この「私」の喚起が「ト思ウ」の最も顕著な機能であると分析する。

新聞の投書や論説記事において、書き手の意見や判断をはっきりと示す断定文は、例えば(17a)のように、ともすれば、読み手にその命題を受け入れることへの押し付けと取られ、読み手からの反発を招く恐れがある。しかし、「ト思ウ」が付加された(17b)では、(17a)と比べると、幾分か反発が抑えられている。

(17) 私は長年、うがいの習慣がなかったが、滅多に風邪をひかなかった。したがって、
a. 感染症予防にうがいは無意味だ。
b. 感染症予防にうがいは無意味だと思う。

(17b)は、森山（1992）の「主観明示用法」であるが、澤田（2016: 101）によれば、この場合、一人称主語を明示し、「あなたはどう思うか知らないが」を後続させることができる。

(18) 私は長年、うがいの習慣がなかったが、滅多に風邪をひかなかった。したがって、**私は、**感染症予防にうがいは無意味だと思う。**あなたはどう思うか知らないが。**

この「ト思ウ」は、「私」を喚起し、話し手の方にスポットライトを当てることで、聞き手の存在を目立たなくさせる。それによって、引用節の内容が話し手の個人的な意見に過ぎず、聞き手が無条件に同意する必要はないことが強調され、意見を押し付ける圧力が弱まることで、反発が抑えられるのである。したがって、この「ト思ウ」は、話し手を顕示する機能を持つのである。
この用法は、新聞の投書と論説記事において、譲歩の後に書き手の意見を述べる際に典型的に使用されていた。

(19) 大学生らを対象にした公的な奨学金に給付型を導入するのは、確かに学生から見れば望ましいことだ。１億総活躍プランに創設の方向性が盛り込まれたが、大学に進学することが社会全体にとってどれだけメリットになるかを考えると、正当化するのは難しいと思う。（2016 年 6 月 10 日、論説、「貸与型の補完　望ましい」）

(19)では、「大学生への給付型の奨学金は学生から見れば望ましいことだ」という考え方は、賛成者も多いと考えられるため、「大学生のための給付型の奨学金を正当化することは難しい」という書き手の意見は、断定形の場合、押し付ける圧力を感じさせ、反発を招く恐れがある。そこで、「ト思ウ」によって、書き手の方に焦点を当てることで、意見を押し付ける圧力が弱められているのである。

4.2. 聞き手の存在を顕示する「ト思ウ」

一方で、新聞の投書や論説記事では、(20b)と(21b)のように、一人称主語を明示し、「あなたはどう思うか知らないが」を後続させると不自然になる場合も見られた。

(20) 結婚したが、彼女も私もそれぞれの県の職員が夫だった。なんとなく似た人生だなあ、とついほほ笑んでしまう。
a. 今は年賀状のやり取り程度だが、もう一度彼女と会いたいと思う。（2015 年 4 月 5 日、投書、「風船取り持つ友」）
b. ？今は年賀状のやり取り程度だが、**私は、**もう一度彼女と会いたいと思う。**あなたはどう思うか知らないが。**
(21) でも最近、札幌の兄からジャガイモが、義姉から高価な子持ちシシャモが届いた時は、うれしかった。地元でとれた新鮮な物を季節ごとに賞味し合うのも、良いことではないか。
a. ようやく色づいた我が家のミカンを、近々送ろうと思う。（2015 年 12 月 6 日、投書、「形式よりも思う心」）
b. ？**私は、**ようやく色づいた我が家のミカンを、近々送ろうと思う。**あなたはどう思うか知らないが。**

(20a)と(21a)の「ト思ウ」の引用節にある希望の「たい」や意志の「よう」には、話し手の心情の表出の意味で用いられる場合、その主語が一人称単数に限られるという性質がある。

(22) ｛私／＊私たち／＊あなた／＊彼／＊彼ら｝はカニが食べたい。
(23) ｛私／＊私たち／＊あなた／＊彼／＊彼ら｝は今日ジョギングをしよう。

(20a)と(21a)では、引用節の「たい」「よう」がすでに一人称単数主語を喚起するため、「ト思ウ」を重複させて「私」を喚起させる必要はない。したがって、この場合、「ト思ウ」は「私」の喚起以外の役割

を担うと推測される。本研究では、この「ト思ウ」は、聞き手の存在を顕示する機能を担うと分析する。

仁田（1991: 58）は、「ト思ウ」の引用節には独り言を含むことができるものの、「ト思ウ」が付加された文全体は、聞き手を想定した対話場面でしか使用されないと指摘する[6]。これは、「ト思ウ」のもう一つの機能を考える上で重要である。というのも、「ト思ウ」が独り言的発話を対話の発話へと変化させることを示唆するためである。

「ト思ウ」のこの機能を考察するために、ここで、日本語における独り言的発話と対話の発話の違いについて触れておきたい。長谷川（2017）は、聞き手に聞かせることを目的とした、対話としての発話には、「提示モード」と「報告モード」という二つの表現方法があることを提唱した。これらの違いは、Hasegawa（2010）の独り言の研究に基づいている。Hasegawa によれば、日本語母語話者は、聞き手に対し敬意と親しさの両方を同時に表現したいときに、(24)の下線部のように、会話の中に独り言と聞こえる発話を混ぜる傾向にある。

(24) 教師：ほんとに英語では苦労します。
学生：えーほんとですかぁ？
教師：ほんと、ほんと。
学生：<u>へぇー、先生でもそうなんだぁ。</u>（Hasegawa 2010: 158）

「提示モード」とは、(24)の下線部の発話のように、聞き手が想定されてはいるものの、独り言としても解釈可能な発話である。一方で、「報告モード」は、(24)における丁寧体を伴う発話のように、独り言としては解釈できない、聞き手に告げる発話である。したがって、同じ内容を伝達する場合でも、「提示モード」は主張という発話内行為の効力が弱いのに対し、「報告モード」は主張性が強いと言える。

この二つの表現方法を本研究の分析に援用すれば、「たい」「よう」の文は、「ト思ウ」がない場合、「提示モード」として、聞き手を前提としてはいるものの、聞き手の反応が期待されない、独り言の色合いが濃い文と解釈できる。それに「ト思ウ」がつくと、「ト思ウ」の文は独り言としては用いられないため、聞き手の反応を想定した「報告モード」の発話であることが強調される。言い換えれば、「ト思ウ」は、「提示モード」と解釈される引用節を、「報告モード」の文として聞き手に告げ知らせ、発話内効果を強めているのである。これが、「たい」「よう」によって、すでに引用節内に一人称単数主語を意味的に含む場合でも「ト思ウ」が使用される理由である。

したがって、聞き手に対して積極的に告げ知らせる(25)の告知文や、(26)の宣言文では、(25a)と(26a)のような「提示モード」では不自然で、必ず「ト思ウ」の付加が必要となる。

(25) ［動画配信者が視聴者に向かって］
a. ？午後から動画のライブ配信をしたい。ぜひ見に来てほしい。
b.午後から動画のライブ配信をしたい<u>と思う</u>。ぜひ見に来てほしい。
(26) ［サッカー選手がサポーターに向かって］
a. ？今年はタイトルを取れるように頑張ろう。ぜひ応援してほしい。
b. 今年はタイトルを取れるように頑張ろう<u>と思う</u>。ぜひ応援してほしい。

この「ト思ウ」は、話し手が聞き手の存在を想定し、引用節の内容を積極的に聞き手に告げ知らせていることを強調する。つまり、「ト思ウ」によって *I tell you* が強調され、聞き手への働きかけが生じるのである。したがって、聞き手の存在を顕示する機能を担うと言える。

新聞の投書や論説記事では、読み手の存在を顕示する「ト思ウ」は、(27)や(28)のように、書き手の決意や意思の表明として、文章末に現れる傾向があった。

(27) これからも世界で災害が起きれば飛んでいく。建築家の仕事は外科医と似ている。外科医は患者が運ばれてきたとき、センチメンタルな気持ちを捨て大手術に臨む。建築家として何ができるか。被災地と向き合い、プロ意識に徹して活動していきたい<u>と思う</u>。

---

[6] 砂川（1978）も、(a)の「ト思ウ」の引用文としての機能を分析し、「ト思ウ」が、「旅行に行こう」という話し手の思考の場と、「私は～と思う」という聞き手への発言の場が融合された「場の二重性」をもたらすと指摘する。

(a) 私は旅行に行こう<u>と思う</u>。

（2015 年 1 月 20 日、論説、「紙の教会　活動の原点」）

(28) しかし、駆け込み乗車などによる遅延はなくならない。利用者にも最低限の乗車マナーは必要なはずだ。正確な運行は、運転側と利用側の双方で生み出していくものではないだろうか。これからもマナーを守って電車を利用しようと思う。

（2016 年 5 月 17 日、投書、「電車マナー守る」）

(27)の「プロ意識に徹して活動していきたい」と(28)の「これからもマナーを守って電車を利用しよう」は、「ト思ウ」がない場合、読み手の反応を想定せず、単に書き手の意思や希望が独り言的に表出されている「提示モード」の文なのか、読み手の反応が期待された「報告モード」の文なのか、その区別がはっきりしない。しかし、「ト思ウ」があることで、告知文や宣言文のように、引用節の内容を読み手に積極的に告げ知らせようとする書き手の意図が強調される。読み手の存在が顕示されることで、働きかける力が強くなる。それによって、引用節の内容に読み手が反応する機会が与えられ、読み手と共同の場としての談話が構築されるのである。

以上、新聞の投書と論説記事において、削除可能な文末の「ト思ウ」には、書き手を顕示するものと、読み手の存在を強調するものの二種類があることを論じた。前者の「ト思ウ」は、「私」を喚起することで書き手の存在を顕示するため、*I think* の「ト思ウ」と言える。一方で、後者の「ト思ウ」は、「私」と対峙する「あなた」としての読み手の存在を意識させるため、*I tell you* の「ト思ウ」と言えるであろう。「ト思ウ」は、引用節の特徴に応じて、書き手と読み手の対峙的関係を喚起し、書き手の方に焦点を当てて、読み手の存在を目立たないようにさせたり、逆に、読み手の方にポットライトを浴びせることで、読み手を談話に巻き込むのである。これが、文末の「ト思ウ」が、意味的に余剰であるにも関わらず、新聞の投書や論説記事で多用される理由なのである。

5. 英語の一人称・二人称代名詞の語用論的機能

本章では、前章で論じた「ト思ウ」に似た機能が、英語の一人称・二人称代名詞の *I* と *you* の置換的使用にも見られることを示す。英語の *I* と *you* は、一般的に、(29)に見られる通り、現場指示用法として話し手と聞き手をそれぞれ指す。しかし、この規則に矛盾していると思われるような例もある。例えば、(30)と(31)では、*you* の代わりに *I* が使用されている（以下、対象の人称代名詞は、筆者により太字・斜体となっている）。

(29) A: Do ***you*** have a pen?
B: No, ***I*** don't.

(30) ***I*** would do that. ***I***'d take plenty of fluids – ***I***'d take that aspirin religiously … and if you need to stay home, stay home. (West 1990: 96)

(31) ***I*** should put it in your pocket and eat it when you get home[7]. (Olsson 1962: 95)

(30)は、医者から患者に向けての発話であるが、薬を飲むのは患者（*you*）の方であるにもかかわらず、あえて *I* が使われている。また、(31)は、話し手が男の子にリンゴをあげた後で、その男の子に向けた発話であるが、この場合も、リンゴを持っているのは男の子（*you*）であるにも関わらず、あえて、*I* が使用されている。これらの *I* は、*if I were you…* を暗示させる。提案や命令などの場面において、相手を直接指す *you* を用いることは、聞き手に攻撃的な印象を与えたり、意見を押し付ける圧力を感じさせ、反発を招く恐れがある。そこで、*I* が使用されることで、その圧力が弱められ、聞き手の反発が防がれているのである（Olsson, 1962: 91; Wales, 1996: 70）。したがって、*You* の代わりに *I* を使用するという選択は、話し手の方にスポットライトを当てることで、聞き手の存在を潜在化させるという焦点の調節のために行われると分析する。この機能が、*I think* の「ト思ウ」と類似しているのである。

一方で、*I* の代わりに *you* が使用されることもある。英語の二人称代名詞の *you* には、現場指示用法だけでなく、(32)のように、人々一般を指す総称用法がある。しかし、この場合も、この規則から逸脱しているような例が見られる。例えば、(33)では、話し手を指す現場指示の *I* の代わりに総称用法の *you* が使用されている。

(32) ***You*** cannot learn a new language in four weeks.

---

[7] イギリス英語では、*would* の代わりに *should* が使われる場合もある（Olsson 1962: 93）。

(33) In one week and two days, I will be finished with five months of treatment for cancer. First they poison ***you***; then they burn ***you***. I've had more fun. And when it's almost over, ***you***'re grateful to absolutely everyone. And I am. … Being sick actually narrows ***your*** world, I'm afraid – makes ***you*** focus more on ***yourself***. Maybe when it's over and ***you*** don't feel like crud all the time, then ***your*** spirit soars. The chief reason to keep working is because it takes ***your*** mind off ***yourself***. … ***You*** can't get through chemo. (Hyman 2004: 163)

(33)は、がん治療という話し手の個人的体験の記述にも関わらず、*I* の代わりに総称用法の *you* が使用されている。この *you* は人々一般を指すため、聞き手を直接指さないが、話し手が聞き手の存在を十分に意識し、巻き込もうとする場合に、*I* の代わりに使われることがあり（Ushie 1994）、この *you* によって、その経験が話し手のみでなく、聞き手にも共有できるものであることが示される（Wales 1996: 79）。話し手は、自己を顕示する *I* で談話をスタートさせるが、これは自己中心的な印象や主観的な印象を聞き手に与えるため、*I* だけの場合、(33)のガン治療の経験は、話し手以外には当てはまらない、個人的な経験と感じされる恐れがある。そこで、総称用法の *you* を用いることで、この発話が、聞き手も含んだ人々一般にも共有できる内容であることを示すのである。この *you* は、話し手が聞き手の存在を十分に意識した場合に使用されるため、聞き手に積極的に告げ知らせる機能を担うと言える。したがって、この、*I* の代わりに *you* を使用するという選択が、日本語の *I tell you* の「ト思ウ」の機能と重なるのである。

6. まとめ

以上、本研究では、まず、日本語の新聞の投書と論説記事において、文末に現れ、意味的に余剰な「ト思ウ」に、書き手を顕示する *I think* の「ト思ウ」と、読み手の存在を強調する *I tell you* の「ト思ウ」の二種類があることを明らかにした。そして、英語の一人称・二人称代名詞の *I* と *you* の置換的使用に注目し、それらに「ト思ウ」と重なる機能があることを示した。日本語の「ト思ウ」と英語の一人称・二人称代名詞は、文法形式も意味も大きく異なるにも関わらず、意味的に余剰な「ト思ウ」を付加するという操作と、人称代名詞の *I* と *you* を置換するという操作の根底には、話し手と聞き手の対峙的関係を喚起し、それぞれの焦点の移動を調整することで、聞き手からの反発を抑えたり、聞き手を対話に巻き込んだりする共通の語用論的機能があるのである。

参照文献

Hasegawa, Yoko（2010）*Soliloquy in Japanese and English.* Amsterdam: John Benjamins.

Hasegawa, Yoko（2014）*Japanese: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

長谷川葉子（2017）「三層モデルによる独り言の分析」、『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』、廣瀬 幸生・島田 雅晴・和田 尚明・金谷 優・長野 明子(編)、26–43、東京：開拓社

Hyman, Eric（2004）The indefinite you. *English Studies* 85: 161–176.

宮崎和人（2001）「動詞「思う」のモーダルな用法について」、『現代日本語研究』8、111–136.

森山卓郎（1992）「文末思考動詞 「思う」をめぐって—文の意味としての主観性・客観性—」、『日本語学』11(9)、105–116.

中山治（1985）「「ぼかし」の構造—日本語の表現心理」、『月刊言語』12、64–69.

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房.

Olsson, Yngve（1962）The Personal Pronouns I and We as Terms of Address. In: F. Behre (ed.) *Contributions to English Syntax and Philology*, 87–98. Gothenburg University Press.

小野正樹（2001）「「ト思ウ」述語文のコミュニケーション機能について」、『日本語教育』110、22–31.

澤田治美（2016）『続・現代意味解釈講義』東京：開拓社

砂川有里子（1987）「引用文の構造と機能　引用文の 3 つの類型について一」、『文芸言語研究（言語篇）』13 号、73–91.

Ushie, Yukiko（1994）Who Are You? And What Are You Doing? Discourse and Pragmatic Functions of the Impersonal Pronoun You in Conversational Narratives. *Ochanomizu University Studies in Art and Culture* 47, 127–147.

Wales, Katie（1996）*Personal Pronouns in Present-Day English*. Cambridge University Press.

West, Candace（1990）Not Just 'Doctors' Orders': Directive-Response Sequences in Patients' Visits to Women and Men Physicians. *Discourse & Society*, 1(1), 85–112.